

「アレクシエーヴィチ氏を迎えて」 顛末記

報告 沼野恭子

二〇一四年の春から数えると二年越しということになる。ベラルーシのロシア語作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ氏を本学に招くプロジェクトに携わっていたのは。

一度はご本人から承諾の返事をもたらしたが、音信不通になり、その後すっかり予定が狂ったのはアレクシエーヴィチさんがノーベル文学賞を受賞したためだった。もちろん彼女がノーベル賞を受けたことは嬉しいし、その意義は計り知れないほど大きいのだが、受賞後、彼女は世界中から招待を受けて超多忙になり、来日実現は遠のいたかに見えた。

備忘録として記しておく、この状況が動きそうだとの情報をも本学非常勤講師の中神美砂先生から得たのは二〇一六年五月。秋田ベラルーシ協会が、一カ月もの長期にわたって療養のためにアレクシエーヴィチさんを秋田に呼ぶという。ところが、なかなか具体的な日程が決まらないようなので、九月初旬に秋田ベラルーシ協会の佐々木正光氏のミンスク出張に、本学大学院生のカチャリーナ・ナザランカさんとともに同行させていたのだ。

ミンスクではアレクシエーヴィチさんの自宅にお邪魔し、福島を訪れたいという希望を確認することができた。その後は、彼女のスケジュールを管理しているドイツ在住のエージェン

トと連絡を取りながら準備を進めることになる。本学では、これを機会にアレクシエーヴィチさんに名誉博士号を贈ろうという決定をした。私は、入国管理事務所に通ってビザ取得の方法を探りながら、日本での催し（記者会見、名誉博士号授与式、講演、インタビュー等）の調整、ポスターや配布冊子の作成を進めた。NHKの鎌倉英也ディレクターが、アレクシエーヴィチさんの特別番組を作るためこのプロジェクトに最初から参加し、さまざまな面で協力してくださった。ちなみに、鎌倉さんはリレー講義「世界の文化」を担当している本学の先生でもある。

私は学生に呼びかけて一月三日（文化の日）に「事前勉強会」をおこない、鎌倉さんが二〇〇〇年に制作した特別番組「ロシア 小さな人々の記録」を上映するとともに、アレクシエーヴィチさんが来校した折にどのような質問をしたらよいかを学生たちと話し合った。鎌倉さんは彼女を福島に案内するため、の周到な準備を重ねた。

結局、日本滞在は一週間になったが、アレクシエーヴィチさんはこちらが用意したプログラムをすべてこなしてくれ（私はほぼ全日程、同行した）、その温かい人柄と筋の通った発言でどこに行っても人々に大きな感銘を与え、次々に浴びせられる質

間に、嫌な顔ひとつせず誠実に答えてくださった。十一月二五日（金）に東京大学で記者会見、芥川賞作家の小野正嗣さんとの質疑応答、翌二六日（土）と二七日（日）は、福島で被災者の方々と会って話を聞いた。

そして、一月二八日（月）に本学で名誉博士号授与式・記念講演・学生との対話がおこなわれた。本学が名誉博士号を贈るのは、一九九九年のドナルド・キーン氏以来、二人目だという。授与式に引き続きおこなわれた「あるユートピアの物語」と題する記念講演は圧巻だった。自分の選んだ文学ジャンルについて、ユートピアに魅せられた人々について、イデオロギーが地に堕ちてもなお自由になれない人びとについて、小さき人々のドラマ、アフガニスタンで従軍したときのこと、チェルノブイリの未曾有の現実について、そして「赤い帝国」の崩壊について……。彼女の声は静かだが、その言葉はじつに力強く、深い悲しみと知的好奇心に満ちていた。

「大事な問いに対する答えをどうとう私は見いだすことができませんでした。私たちの苦しみはなぜ自由に変換されないのかという問いです。私は時代の後を、人間の後を追っていきまます」との言葉で講演が締めくくられると、会場からは割れんばかりの拍手が起こった。

講演に続く「学生との対話」では、学生たちが次々に質の高い質問をし、それに対してアレクシエーヴィチさんがまた深い思索にもとづく答えを丁寧に返してくださった。学生たちの質問の素晴らしさは取材に来ていた多くのジャーナリストを驚かせたようだ（この「学生との対話」は本学出版会の冊子『Peria 2017』に掲載される予定）。翌日の「東京新聞」では、一面と七

面を使って講演や学生とのやりとりを詳しく伝え、最新著書『セカンドハンドの時代』の書評も含めると、アレクシエーヴィチさんについて報道したマスコミは相当な数にのぼる。

ひとつだけ残念だったのは、人為的な接続ミスにより同時通訳レシーバーが使えず、急遽、逐語通訳に切り替えざるを得なかったことだ。通訳の吉岡ゆきさんと北川和美さんが冷静で確な対処をしてくださったおかげで表面的には何事もなかったように繕えたが、私は自分自身で事前に機材の点検をしなかったことを死ぬほど後悔した。

後日、雪が降り続き「本物の冬」になったというミンスクからアレクシエーヴィチさんは、「日本というこんなに新しい世界を知ることができて楽しく面白かった」とメールを送ってくくださった。

なお、名誉博士号授与式は大学が主催し、講演と「学生との対話」は科研（B）「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨橋的研究」が主催した。高坂香さんをはじめとする総務企画課の皆さん、大学関係の方々、科研メンバーの皆さん、沼野ゼミの学生・院生、NHKの取材クルーの皆さん、通訳の吉岡さん、北川さん、中神さん、ご協力いただきましたすべての方々にも心より感謝申し上げます。